

『発心集』 頭基説話の琵琶

——長明の情念——

今 村 み 忍 子

はじめに

「和歌・管絃の道、人にしられたりけり」と『十訓抄』に紹介される鴨長明であるが、自らも『方丈記』に管絃の抄物や折琴・繼琵琶の所持や演奏を記し、また『無名抄』に管絃の師中原有安から後継者とみなされていたと記していることは周知である。中でも特に琵琶に強い自負と執着を有していたことは、和歌所時代の同僚でかつ音楽家でもある家長の、『源家長日記』に記される琵琶「手習」をめぐる一件、琵琶の楽書『文机談』の秘曲尽くしの一件等に窺えるところである。『文机談』は「この有安には鴨長明と聞へしすき物もならひ伝けり。わづかに楊真操までうけとりて、のこりはゆるさずしてうせにけり」と、長明が中原有安から秘曲の一つを相承したと伝える。有安からの相承は伏見宮本『琵琶血脈』にも載る。また私見ではあるが、長明は、有安の説を中心に編纂した琵琶の楽書『胡琴教録』の作者である可能性もある⁽¹⁾。

本稿は、相承に名を連ねる琵琶の名手であり、琵琶に強く執着した長明の意識を探る試みとして、長明の著作『発心集』の説話における一叙述に着目する。『発心集』は説話集であるが、『方丈記』や『無名抄』との関連性が多く言

及されており、また三木紀人氏はそれら二書と同様、『発心集』もまた長明自身の「注釈」的側面を有していると指摘している。⁽²⁾ 本稿に取り上げるのは一見さりげなく付加されたと見える一説話における叙述である。

流布本『発心集』巻五―八「中納言顕基、出家・籠居の事」の顕基の「配所の月を見ばや」というせりふに、「いといみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ」という長明独自の叙述が付随する。長明がこの叙述を加えた意識、もしくはそこにまつわる情念を探りたいと思う。

一

「中納言顕基、出家・籠居の事」は、先行する顕基関係の諸作品、『後拾遺和歌集』『続本朝往生伝』『江談抄』『大鏡』『袋草紙』『今鏡』『古事談』等に既出の話題を集成し、⁽³⁾ 在俗時代、出家、出家後という経緯に、仏道への傾斜、出家の決意、昔への恋慕、仏道に専念しつつもなお心に懸かる子への恩愛、といった内面を重ね、一つのエピソードでは語り尽くせない、繊細かつ陰影深い顕基像を描く。編者長明の顕基に対する高い関心を窺わせるものである。

顕基説話は次のように始まる。

中納言顕基は大納言俊賢の息、後一条の御門に時めかし仕へ給ひて、わかうより司・位につけて恨みなかりけれど、心は此の世のさかえを好まず、深く仏道を願ひ、菩提を望む思ひのみあり。つねのことくさには、彼の楽天の詩に、「古墓何世人。不知姓与名。化為路傍土。年々春草生」といふ事を口づけ給へり。いといみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ、「罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばや」となむ願はれける。

在俗時代の顕基は、恵まれた官途にありながら、内面的には現世の栄達を厭い、仏道に傾斜していた。その日常において顕基が常に口にしていた一つは白楽天の詩の一節であり、もう一つは顕基自身のせりふである。

さて、後者の「配所の月」のせりふは、顕基の名せりふとして諸書に見えるものである。しかしせりふに付随する

「いといみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ」という叙述は長明独自の付加であるようだ。せりふをめぐる諸作品の文脈を大よその成立順に掲げよう。

①『江談抄』第三

「入道中納言顕基常被談云、無咎被流罪配所ニテ月ヲ見バヤ云々」

②『袋草紙』上巻「雑談」

「又常云、配所にて月を見ばやと云々」

③『宝物集』巻七

「入道中納言顕基卿の、『罪なくして配所の月を見ばや』とねがひ給しは、流罪このもしきにはあらず、此世をおもひすつべき善知識にあはんとなり」

④『古事談』巻一—四七「後一条院ノ寵臣中納言顕基、出家ノ事」

「尋常之時、……又云、アハレ、無罪配所ノ月ヲ見バヤ云々」

⑤『平家物語』巻三「大臣流罪」

「もとより罪無うして配所の月をみると云ふ事をば心あるきは人の願ふ事なれば、大臣敢て事ともし給はず」

⑥『撰集抄』巻四—五「顕基中納言発心の事」

「只朝暮は『あはれ罪なくして配所の月を見ばや』とて涙をながし」

「『罪なくして配所の月を見ばや』と願ひ給ひけん、げにげに哀れに侍り。元和十五年の昔、思ひいだされて、心のうちそぞろに澄みても侍るかな」

⑦『十訓抄』第九「可停懇望事」

「顕基中納言のつねに、罪なくて配所の月を見ばやといはれけるには似給はず、能善知識の次をえながら、身を空

しくなしはてし、無益のことか」

⑧ 津軽家本『中納言顕基事』

「イミジキ肅人^{スキ}ニテ夜ル昼ル琵琶ヲ引キツツ罪無シテ配所ノ月ヲ見バヤト申サレケル人ナリ」

⑨ 『徒然草』五段

「顕基中納言のいひけん、配所の月、罪なくて見んことも、さも覚えぬべし」

⑩ 『金島書』

「げにや罪なくて、配所の月を見る事は、古人の望みなるものを」

⑪ 『東齋随筆』「人事類」

「又『哀レ、罪無シテ配所ノ月ヲ見バヤ』トノ給ヘリ」

⑫ 『扶桑隱逸伝』

「恒言曰、願無罪而見配所月」

⑬ 『二十一代集才子伝』「権中納言顕基」

「其常言云、人儻得無罪見謫所之月則幸矣」

⑭ 近松浄瑠璃『山崎與次兵衛壽の門松』

「おぼつか。罪なくて、配所の月を見んといふ、古人の物好いかなれや。日影も見せぬ座敷牢」

無実の罪による配流という、最悪の不幸を甘受することを願うこのせりふは、常識的に考えれば奇異なものとしか
言いようがないだろう。⁽⁴⁾ 以上に掲げた諸作品も、このせりふへの対応はさまざまである。初見である『江談抄』⁽¹⁾
は奇異な言動として語られたものかも知れない。近松⁽¹⁴⁾などは率直に「物好き」とさえ評している。善知識を求
めたとする解釈⁽³⁾、⁽⁷⁾も『宝物集』などは「流罪このもしきにはあらず」と敢えて断っている。また配所に身を

置く者(⑤、⑩)には「心あるきはの人」「古人」の望んだ境地であるからと、自らを慰めるために想起されるものとなっている。『発心集』を含む出家説話(②、④、⑥等)に引かれるときは、概ね現世を厭う、出家につながる心情の表出として評価されている。

さて、せりふそのものの本文は諸書において大差ない。しかし、せりふに付随する表現は大半が「常に」口にしていたというのに対し、『発心集』と津軽家本『中納言顕基事』にのみ「いみじきすき人にて」「朝夕(夜ル昼ル)」「琵琶をひきつつ」という叙述が付随する。津軽家本『中納言顕基事』は成立年不詳の説経用冊子で、筆者は先に両書の関係を検討し、『中納言顕基事』は『発心集』に直接依拠して作成された後世のものと判断した⁽³⁾。よって、この叙述は長明による独自の付加と結論する。

二

では、長明が「いといみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ」との叙述を付加した意図は何なのか。またそこにはどのような意識が潜んでいるのだろうか。

まず、長明が顕基の「配所の月を見ばや」というせりふに「琵琶をひきつつ」と加えたのは、「配所」に「琵琶」が不可欠であるという意識があったと思われる、その意識は白楽天の「琵琶行」に由来すると見る⁽⁶⁾。

「琵琶行」は白楽天が讒奏によって九江郡の司馬に左遷された折の作品「琵琶行並序」(『白氏文集』卷十二「感傷」)である。白楽天は一夜、月明の潯陽江で琵琶の音を耳にし、奏者である老女から身の上話を聞く。老女は都(長安)に育ち、琵琶を穆・曹の二人の名手に学んで教坊に属し、人気を博した過去をもつ。しかし零落して商人の妻となり、この江で空船を守っているという。白楽天は自らの淪落の人生を老女の人生に重ね、配所の感慨を述べる。

白楽天は顕基のせりふのとおり、「罪なくして罪をかうぶりて配所の月を見」た人である。白楽天のわが国における

享受は言を要するまでもなく、「琵琶行」が配所に琵琶を配するモチーフとなることは『源氏物語』『明石』でも知られるところである。光源氏は配所明石で明石入道の娘の琵琶を聞くことになる。入道は娘の琵琶を次のように紹介する。「商人の中にてだにこそ、ふる琴ききはやす人は侍れ。琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人、いにしへも難う侍りしを、をさをさ、とどこほる事なう、なつかしき手など、すぢ殊になむ」。「商人の中」、「ふる琴」琵琶、が「琵琶行」を指していることは言うまでもない。

長明はこうした「琵琶行」の享受を顕基のせりふに感知したのであろう。もっともその推測は当然と言えば当然の推測である。『発心集』を始め顕基出家説話は、「配所の月」のせりふの前に、顕基が白楽天の『白氏文集』卷二「続古詩十首」の第二の一節「古墓……」を口にしていたと、白楽天の詩に親しんでいたことを明白にしており、したがって「配所の月」のせりふに白楽天のもう一つの詩「琵琶行」の影響を看取することは長明ならずとも容易になしうるところであらう。

現に顕基の「配所の月」のせりふに「琵琶行」を想起することは前節に掲げた⑥の『撰集抄』や⑤の『平家物語』の理解にも窺われるものである。『撰集抄』には「『罪なくして配所の月を見ばや』と願ひ給ひけん、げにげに哀れに侍り。元和十五年の昔、思ひいだされて、心のうちそぞろに澄みても侍るかな」とあり、編者は顕基のせりふに「元和十五年の昔」、すなわち白楽天の「琵琶行」を想起している⁽⁸⁾。また『平家物語』には「もとより罪無うして配所の月をみると云ふ事をば心あるきは人の願ふことなれば、大臣敢て事ともし給はず、彼の唐の太子の賓客白楽天、潯陽の江の辺にやすらひ給ひけん其の古を想像り、……常は朗月を望み、浦風に嘯き、琵琶を弾じ」と、琵琶の第一人者ある藤原師長の配所に、顕基のせりふと「琵琶行」を共に引いている。もっとも『撰集抄』などは『発心集』を享受した可能性もある。とすればなおさら、長明が「琵琶行」を意識して叙述したとの推測は自明のことでもあらう。

さて、ここで注目すべきは、長明が「配所の月」のせりふに「琵琶行」を取り合わせたということのみではなく、

「琵琶行」の琵琶がいかなる琵琶としてわが国の琵琶奏者——長明もその一人である——に意識されていたか、ということである。奏者の老女は都に育ち、琵琶を穆・曹の二人の名手に学んで教坊（官設の歌舞・音楽教習所）に所属していたという。「琵琶行」の琵琶は極めて正統な相承を背景とした琵琶なのである。

このことがわが国において受容されていることを等閑視することはできない。『教訓抄』巻八（同文で『体源抄』巻八にも引用）には、

或抄云、琵琶ハ胡国ヨリ出デテ漢家ニ盛ナリ。明月ノ団々タルヲ懷テ、玉響高々タルヲ発ス。……謝鎮西ハ沙漠ニ引、白樂天ハ潯陽ニ聞ク。……承和ノ遣唐使貞敏朝臣、簾承武ニ習キタテ、西ノ宮ノオトド、南宮親王、此道ニ勝レ給リ。

とある。また伏見宮本『文机談』には、

此道の二流にわかれゆく事、自然の意樂に似たりといへども、つらつらこれをおもふに、太国もまたしかり。穆氏曹氏はふたつの善才也、長安のうため、ともに両説をふたり。西師・桂師は両流の祖宗也。

ともあるなど、「琵琶行」の琵琶はわが国の琵琶につながる琵琶であり、穆・曹に学んだ老女（『文机談』の「長安のうため」の琵琶は中国の琵琶の正統な奏者である。このことは琵琶の専門家である長明なら当然意識していたはずであり、その証しに『方丈記』において長明自身が「潯陽の江を思ひやりて源都督のおこなひをならふ」と記している。琵琶の相承者である長明は「源都督のおこなひ」すなわち桂流琵琶の演奏をなしうる自らの立場を示しつつ「琵琶行」を想起し、かつ琵琶を奏しているのである。

三

長明が顕基に「琵琶をひきつつ」とする時、単に「琵琶行」の世界を鮮明にするというだけでそれが可能であろう

か。頭基は『方丈記』の長明のごとく、あるいはまた先に見た『平家物語』の師長——彼はわが国における琵琶史上最大の逸物である——のように、「潯陽の江」を思いやりつつ琵琶を弾くにふさわしい人物なのであるか。長明にとって頭基は、そうした正統な琵琶を弾く人物として認識されていなければならないのではないだろうか。

そこで長明の作品における他の琵琶について少々概観してみよう。『発心集』には琵琶関係の説話が頭基説話以外に三話ある。

一つは卷三—十二「松室童子、成仏の事」である。読誦仙になった児が琵琶を師に所望、竹生島において仙樂を奏する。その琵琶が今に竹生島に伝わることを長明は「うきたる事にあらず」と強調し、琵琶の名手ならではの言うべく、琵琶の伝来に対する強い関心を示している。ちなみにこの話は『源平盛衰記』卷二十八に類話が載り、その琵琶を平経正が奏したことが記され、また『樂家録』四十一「音楽珍器」には、その琵琶は「仙童」との号で記録されている。

もう一つは、卷七—五「太子の御墓覚能上人、管絃を好むこと」である。僧覚能が板の切れ端で琵琶を形造ったものを弾き、「菩薩聖衆の樂の音」を思いやって往生した話である。これは琵琶とは呼び難いものであるが、なお、自ら琵琶の製作をなした（『方丈記』の「折琴」・「繼琵琶」、『文机談』の「手習」）長明の関心を見ることができ、また管絃による往生という、長明の仏道への思いに関わるものである。

もう一つ、卷六—九は次のような話である。

大貳資通は、琵琶の上手なり。信明、大納言経信の師なり。彼の人、さらに尋常の後世の勤めをせず。只、日ごとに持仏堂に入りて、数をとらせつつ琵琶の曲をひきてぞ、極樂に廻向しける。

「信明」は正確には「信明の弟子」とあるべきであるが、テキスト本文の不審はともかく、ここには源資通の琵琶相承が記される。資通は『琵琶血脈』などで、信明から資通、資通から経信への相承が確認される、桂流琵琶の相承に

おける重要な人物である。この経信の流れは『胡琴教録』における有安の発言によると、経信から基綱を経て信綱と大原尾張尼に伝えられ、有安はその兩人から相承した。よって長明自身が有安から習い得た流れでもあり、『方丈記』に「源都督ノ行ヒヲナラフ」（源都督は経信）とあることがそれを明確にしている。ここに資通の琵琶を記す長明は、琵琶の相承に意識的であったことが窺えるのである。

以上三話の琵琶は話の中心素材でもあり、顕基説話の琵琶よりもその関心の度合いは強いと言ってよい。しかしいわゆる琵琶という見地から見ると、『発心集』において琵琶を演奏しているのは、資通と顕基の二人のみである。資通にはその相承が明らかに記されている。長明は顕基についても琵琶を弾くにふさわしい人物として認識していたのではあるまいか。

顕基が琵琶の奏者であるなら、その琵琶は琵琶の名手である祖父源高明の琵琶の流れということになる。

その高明こそ、他ならぬ「配所の月」を見た人であった。高明は醍醐天皇の皇子にして源姓を賜って臣下に下った。左大臣に至るが、為平親王を婿としたことから、安和の変により、謀反の企てありと密告され大宰府に流された。藤原氏の摂関体制を脅かす存在となったために失脚させられた高明はまさに顕基のせりふのごとく、「罪なくして罪をかうぶりて、配所の月」を見た人である。

誕生した時にはすでに没していた祖父を、顕基がどのように意識していたかは定かではない。しかし、高明の配流という逆境から身を起こした父俊賢の処世は、謀略に満ちていると藤原実資が再三非難するごときものであった。しかもそれは顕基と隆国という二人の息子達の官途を思いやつてのことでもある。⁽¹⁰⁾ 顕基が恵まれた官途を喜ばなかったとされる背景には、あるいは祖父の悲劇や、それ故の父の清廉ならざる生き方への屈折した思いがあったのかも知れない。

顕基のせりふに顕基自身の祖父への思いが込められているか否かは別として、『発心集』が「配所」のせりふに琵琶

を付随させる叙述は、高明が琵琶の名手であることを想起したとき、顕基のせりふと配所の高明とが結びつく仕組みになっていると言えるように思う。とすれば、長明は顕基の琵琶に高明の琵琶を見ていたと推測することが可能であると思われる。

高明はわが国の琵琶の相承において、必ず挙げられる人物である。高明が前節に引いた『教訓抄』等に「承和ノ遣唐使貞敏朝臣、廉承武ニ習キタテ、西ノ宮ノオトド、南宮親王、此道ニ勝レ給リ」（「西ノ宮ノオトド」は高明）と言及されているとおり、唐から伝来した正統な琵琶をわが国において相承した名手として挙げられるのである。『文机談』によると、琵琶の秘曲（石上流泉・啄木・楊真操）は藤原貞敏が唐の廉承武から相承し、貞敏から清和天皇およびその皇子貞保親王（貞保は清和天皇からも相承）に、貞保親王から源脩に、源脩から源高明と源博雅に相承されたところ。この記述は群書類従本及び伏見宮本の両『琵琶血脉』、また『体源抄』八「琵琶」所載の「伝来次第」等、他の楽書の記す相承と一致する。『文机談』はさらに高明は廉承武の霊から、もう一つの秘曲である石上上原をも伝授されたと記し、「穆曹の二善もこれにはいかかと耳あきらかにして」と「琵琶行」の「穆・曹」が引き合いに出されている。類話は『吉野吉水院楽書』及び『十訓抄』第十にも載る。

また『御遊抄』によると、高明は天慶二年三月九日の朝観行幸の御遊、天慶九年十一月十八日の清暑堂御神楽の御遊に琵琶を担当し、『吉野吉水院楽書』には天徳四年内裏歌合の御遊に琵琶を担当したことが記されている。さらに高明は『体源抄』巻三によると、天曆五年には「内教坊別当」を勤めている。内教坊は女楽、踏歌を掌るところであり、唐の「琵琶行」の奏者も若き日「教坊」に所属していた。

琵琶を専門とする人々にとって、高明は琵琶の名手であるのみならず、「琵琶行」の琵琶とも容易に結びつく人物だったと言える。長明は顕基のせりふに「琵琶行」を看取すると同時に、配所の月を見た高明とその琵琶を想起したのではあるまいか。

四

では顕基の琵琶はどのようなのであろうか。顕基の琵琶を伝える資料は、『十訓抄』第十「可庶幾才能芸業事」に載る説話と、楽書の『文机談』における言及である（近世の『扶桑隱逸伝』に「時々弾琵琶」、「二十一代集才子伝」にも「琵琶巧手」とあるが、これは『発心集』や『十訓抄』から得た認識であるかも知れないのでここでは資料としない）。

さて『十訓抄』の話は、出家後上醍醐に籠っていた顕基に、醍醐の大僧正が「琵琶の三曲といふなるもの、老い法師にひきて聞かせ給へ」と所望し、弾いて聞かせると、あくびをたびたびして「あはれ花園より詣でくる目くら法師の、極樂のあましたりのをととて引侍るはたうときものを、その曲をば伝え給はぬにや」と問うので、まだ伝受していない、と答えて終わったといい、「醍醐の大僧正」すなわち真言宗小野流の仁海僧正（大僧正は誤り）を、広沢流の寛朝が琵琶秘曲を弾いて心を澄ましたことと比較し、仁海の無理解、無関心を批判したものである。

この仁海は顕基が醍醐寺に移ってから師であり、人間関係や話の背景は事実と齟齬をきたさない。顕基は長元九年（一〇三六）大原に出家（『左経記』等）し、延殷に受戒、後、師と共に横川楞嚴院に登り、さらには師共々醍醐寺に移る（『明匠略伝』）。そして長暦三年（一〇三九）、醍醐寺の仁海の瀉瓶弟子となり（『伝法灌頂師資相承血脉』『血脉類集記』『野沢血脉集』等）、その八年後四十八歳で没している。醍醐寺への移住の理由は、醍醐寺が醍醐天皇の御願寺であり、祖父源高明に始まる醍醐源氏にゆかりある寺であるからだろう。顕基以前には、高明女と為平親王との間の子敦定が出家（『権記』長保三年二月十六日条、『小右記目録』長保三年二月十六日）、その敦定の母、すなわち顕基のおばも出家（『小右記』長和四年九月二十三日条）、また顕基の「伯父醍醐入道」なる人物もいた（『小右記』治安三年十二月十五日条。この日、伯父の死によって延期されていた顕基の藏人頭補任が実現した）。また顕基以後には弟隆国の息定賢が醍醐寺十二代の座主となっている。⁽¹⁾『十訓抄』は第六の顕基出家説話でも「上醍醐に住て」と他書にな

い記述を加えており、編者は特別に顕基の上醍醐居住を意識していた節がある。

さて、『十訓抄』で注目されるのは、顕基が秘曲を伝えていたということである。もう一つ『文机談』を照合してみよう。『文机談』は先に見たように高明に至る相承を記し、続けて高明からの相承について次のように記す⁽¹²⁾。

西宮殿の君達、守隆も伝たまはず、朱雀の戸部もさもなかりけり。ただ姫君一所ばかりにぞ此一曲をも申をかせをはしましける。一条院御時、この上原曲のさたいできて、中納言顕基卿をもて、正説をきこしめさんやと叡慮ありければ、密々に御入内ありて申させ給けるとかや承れども、実否いかが侍けん。この御流のとのばら、ついに箕裘むなしくしてきこえ給はず。顕基の禅閣ばかりこそそのさたありけりと見え侍れども、系図血脈などにも入たまはず、ひとり上のだいごの仏法僧にてやみたまひぬ。

高明からの伝授は孫守隆や子息俊賢にはなく、女子一人が上原の曲を伝受した。一条院が顕基を仲介として女子からその正説を聞いた（相承した）という伝承があるが、実否は不明である。高明の子孫の男子達はその流れを伝えることはなかった。ただ顕基だけはその流れを相承したと記録に見えるが、彼も系図や血脈に載ることなく、上醍醐の僧として終わってしまった。

『文机談』の知識には『十訓抄』の先の説話があるかも知れない。ともあれ、消極的ながらも、ここに顕基が高明の流れを相承したと記されている。顕基が琵琶を相承したのであれば、顕基は高明の没後の誕生であるから、おそらく顕基は高明が伝授したという女子、おばに当たる女性から高明の琵琶を相承したと見ることができよう。顕基が一条院と高明女子との仲介をなしているのも、顕基がこのお婆と琵琶を介した関係にあったためと解される。そのお婆が醍醐寺に出家した為平親王の妃と同一人であるかどうかは不明であるが、彼女の出家は顕基十六歳の時であり、それ以前に伝授があったとしてもよいし、『十訓抄』の舞台が醍醐寺であるのは両者の琵琶を介した関わりをほのかに伝えているのかも知れない。しかし『文机談』が記すように、確かに琵琶の血脈類に顕基の名は見えず、高明の流れは後

継者を記されていない。

長明が顕基の「配所の月」のせりふに琵琶を添えたのも、顕基が高明の流れを相承しているという認識に基づいていたと理解してよいのではないだろうか。しかも顕基は長明同様、相承者でありながら出家して後継者をもつことなく終わった。顕基の琵琶相承の認識をほのかに示すことで、長明は自身の琵琶に対する思いをそこに託したのではないかと思うのである。

なお、『発心集』には顕基の醍醐寺移住のことは記されない。が、醍醐寺は長明の住んだ日野にほど近く、長明は醍醐寺と交流をもった節がある。⁽¹⁾少なくとも『方丈記』には「これより峰つづき、炭山を越え、笠取を過ぎて」とその往還が記されている。「笠取」は顕基がかつて住んだ上醍醐である。顕基も長明も大原から移住したという軌跡を等しくする。この事実を長明が知らなかったとは思えない。顕基の琵琶への認識や人物への共感はこのように両者の共通する琵琶や足跡にも要因があると言えるかも知れない。

五

さて、『方丈記』に次のようなくだりがある。

若跡ノ白波ニコノ身ヲ寄スル朝ニハ、岡屋ニ行キカフ船ヲナガメテ満沙弥ガ風情ヲヌスミ、モシ桂ノ風葉ヲ鳴ラスタニハ、潯陽ノ江ヲ想ヒヤリテ源都督ノ行ヒヲナラフ。

『方丈記』にこのように記した時と、『発心集』の顕基説話を叙述した時とどちらが先かは不明である。しかしこの『方丈記』の、朝に（和歌を口ずさみ）夕に、白楽天の配所、潯陽江を思いやりつつ「源都督ノ行ヒ」である琵琶を弾く長明の自画像と、「朝夕琵琶をひきつつ、罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばや」と願う『発心集』の顕基と、何と重なることか。このことは偶然ではないだろう。顕基の「配所の月」のせりふに琵琶が付随していなければさほ

ど両者の印象は重ならない。ひとえに琵琶が付随したことで両者の姿、有り様が一致してくると言えよう。

さらには、そのことによって、琵琶に関する叙述の前、『発心集』の顕基が白樂天の詩「古墓何世人。不知姓与名。化為路傍土。年々春草生」を口ずさんでいたことと、『方丈記』の長明が満誓の有名な無常歌「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎゆく船の跡の白波」を想起する部分も重なってくる。顕基の漢詩、長明の和歌という対応で、両者の無常世界への想念が一対化するものとなっているのである。

そこで考えられることは、長明は顕基に琵琶を付随させることによって顕基との自己同一化を目したのではあるまいか、ということである。では、長明は顕基との自己同一化によって何を意図したのであるうか。

それには顕基に長明が冠した「いといみじきすき人にて」という評価が関わってくると思われる。さりげなく冠しているようであるが、叙述に琵琶がなければ顕基を数寄人とする表現にはさほど説得力はない。琵琶を加えたことで直前の漢詩を口ずさむ部分も、また「配所」のせりふ自体も顕基の数寄として印象付けられることになるだろう。

「数寄」が長明の最大の関心事の一つであることは言うまでもない。和歌に管絃に心血を注いだ長明である。「すき」「すき物」「すき人」の語は歌書の『無名抄』⁽¹⁴⁾には当然見えるが、仏教説話集である『発心集』では卷六のいわゆる数寄説話群においてのみ集中しており、顕基に冠せられたのは唯一の例外である。その点からも、長明のこの付加は異例であり、そのことが顕基への自己同一化の意味を潜ませているように思われるのである。

顕基が白樂天の詩を口ずさみ、琵琶を弾き、配所を願うことは、『発心集』の文脈上、「心は此の世のさかえを好まず、深く仏道を願ひ、菩提を望む思ひのみあり」という心の表れとしてある。それがなぜ数寄人となるのか。その根拠は卷六の数寄説話群に述べられる数寄と仏道との相關思想にある。卷六の第六話で成通を「いみじきすき人にて、世の濁りに心をそめず」と評し、八話で裏頭樂を唱歌した時光・茂光について「此の世を思ひすてむ事も、数寄はこゝにたよりとなりぬべし」と評し、三首の和歌を詠じて行とした宝日上人について「和歌はよくことわりを極むる道

なれば、これによせて心をすまし、世の常なきを觀ぜんわざども、便り有りぬべし」と評し、持仏堂で琵琶を弾いて勤行とした資通の話に続けて、「中にも数奇と云ふは、人の交はりを好まず、身のしづめるをも愁へず、花の咲き散るをあはれみ、月の出入を思ふに付けて、常に心を澄まして、世の濁りにしまぬを事とすれば、おのづから生滅のこともわりも顯はれ、名利の余執つきぬべし。これ、出離解脱の門出に侍るべし」とまとめている。

こうした長明の数寄思想からすれば、顯基の「罪なくして罪をかうぶりて、配所にて月を見ばや」というせりふは「身のしづめるをも愁へず」「月の出入を思ふ」ことであり、琵琶も無常詩の詠も「世の濁りに心をそめず」「此の世を思ひすてむ事」であり、「心をすまし、世の常なきを觀ぜんわざども」である。そして「常に心を澄まして、世の濁りにしまぬを事とすれば、おのづから生滅のことわりも顯はれ、名利の余執つきぬべし。これ、出離解脱の門出に侍るべし」ということになる。それはすなわち顯基の、「心は此の世のさかえを好まず、深く仏道を願ひ、菩提を望む思ひのみあり」という思いに合致する。なればこそ長明は顯基に「い、い、み、じ、き、す、き、人」と最大級のすき人を冠したわけである。

長明は顯基との自己同一化によって自身が「いみじきすき人」であることの意識を重ねたものと見る。そのことにより、顯基の「深く仏道を願ひ、菩提を望む思ひ」をおのれのものとした。顯基の心情に限りなく寄り添うことで、数寄に心を寄せた自身の、数寄は仏道への門出であるという、俗世離脱の境地を託したものと考える。

六

ここにもう一つ、顯基に琵琶を弾かせ自己同一化を試みた長明の意識に、加えて考えたいことがある。それは実に長明自身が「配所の月」を見た人であり、それも琵琶故の配所であったと推察されることである。

以前拙論にも出したことでもあるが、⁽¹⁵⁾長明にとって日野は配所（に準ずるもの）であったと言えると思うのである。

それは『文机談』の伝える秘曲尽くしの一件に関わる。長明はある時願主となって秘曲尽くしの会を開き、有名な楽人を誘ったその席で自ら琵琶の秘曲を担当した。ところがそれが未伝授の啄木であったとされ、藤原孝道から後鳥羽院に訴えられた。長明は伝受した楊真操を啄木に模したのであって、啄木そのものを奏したのではないと弁明し、院も通常の罪には相当しないと思っていた。ところが、孝道はさらに強行に迫り、「ついに長明洛陽を辞して……方丈の室を結びてぞ、のこりすくなき春秋をばをくりむかへける」ということになった。

長明が大原から日野に移住したのはその結果であろうというのが、早く原田行造氏が提唱⁽¹⁶⁾し、また同じ見解に至った筆者の私見であった。なぜならこの時自作の琵琶「手習」を院に奉ったとあるが、『源家長日記』にも同様に「手習」を院から召されたとある。どうやらこれが断罪処置であったと推定されるのだが、『家長日記』によればそれは長明が大原にいた折のことであった。伏見宮旧蔵『琵琶秘曲伝受記』所載の藤原定輔の「太上天皇啄木御伝習次第」、および「花山院右大臣記」によると、この「手習」は元久二年六月十八日の院の啄木伝受の折に師の定輔に禄として下賜されているので、このことから事件の史実性やその時期が、出家後大原在住期の出来事と推定されるのである。

秘曲尽くし事件の後遺は、前節に頭基と重なる自画像として引いた部分に続く『方丈記』の、日野の閑居生活の描写に見て取ることができるよう思われる。

モシ桂ノ風葉ヲ鳴ラスタニハ、潯陽ノ江ヲ想ヒヤリテ源都督ノ行ヒヲナラフ。若余興アレバ、シバシバ、松ノヒビキニ秋風楽ヲタグヘ、水ノ音ニ流泉ノ曲ヲアヤツル。芸ハコレ拙ケレドモ、人ノ耳ヲ悦バシメムトニハアラズ。ヒトリ調べヒトリ詠ジテ、ミヅカラ情ヲ養フバカリナリ。

「潯陽ノ江」は白楽天の配所であり、流泉の曲は未伝受であるはずの琵琶の秘曲である。「ヒトリ」を強調するのは、秘曲尽くしの会で有名な楽人から盛んな賞賛を得、またそれ故に断罪されたことを意識してのことではあるまいか。そして何よりも「源都督ノ行ヒヲナラフ」と自らの琵琶の立場を示すことに、長明の情念が見える。長明は有安を

師としているので「源都督」経信の桂流のみならず、もう一流の西流をも習っている。『胡琴教録』の有安自身の言葉によると、有安は桂流琵琶を経信の孫信綱、および経信息基綱の外孫大原尾張尼から、西流琵琶を博業、信西、源頭仲女四条殿から相承している。『文机談』も有安が西流の琵琶を博業と重通から相承したと記している。長明が有安から伝授を許された楊真操は、『胡琴教録』によると有安が信西から伝授されたものであるから西流である。にも関わらず長明がここで経信流の演奏を記したのは、秘曲尽くしの一件で、西流の中心人物である孝道から訴えられたことが影を投じているであろう。孝道を中心とする西流に対する屈折した思いが、ここで経信流の演奏を強調することになったと思われるのである。

もともと、無論それだけではなく、もともと長明は桂流に対する思いが強かったと思う。長明が和歌の師とする俊恵は経信の孫であり、長明が経信に敬愛の念を抱く理由ともなる。琵琶の面から言えば、桂流は経信が大納言、基綱が中納言で、経信が関白師通の師になるなど、堂上の琵琶であることも理由となろう。西流は僧賢円を祖とし、尾張守孝定ら地下の琵琶である。長明の、自らは賀茂社の氏人である血筋の誇りが、経信流により親近することになったと思われる。

それにつけて大原の地に居住した長明には、『胡琴教録』が記す桂流の大原尾張尼の相承への思いもあったのではなかったか。『胡琴教録』によれば大原にはかつて経信流のもつとも正統な継承者である大原尾張尼がおり、有安は三年通つてようやく秘曲を相承し、また経信・基綱の自筆の秘譜を授けられたという。⁽¹⁷⁾森下要治氏は『胡琴教録』のこの相承の記述に有安の桂流に対する「情念」を指摘している。⁽¹⁸⁾納得するものであるが、『胡琴教録』の筆録者を長明であろうとする私見により、その情念は談話者有安のものであると同時に、むしろそれ以上に、筆録者である長明のものではあるまいかと加えたいと思う。

長明は経信を「都督」と、大宰権帥の官名で呼んでいる。単なる置き換え可能な呼称ではなく、経信が大宰府で没

したことを思つてのことであろう。とすれば、流罪でこそないが、都から遠く離れた経信の大宰府は、あたかも白楽天の配所、潯陽江に相当し、かつ自身の琵琶故の挫折による日野居住と重ねられていると言えるように思う。

長明が顕基の「配所の月」のせりふに反応したのも、こうした自身の配所への思いが強く作用したためではあるまいか。長明が顕基に琵琶を弾かせることによって、顕基との自己同一化を図ったのは、「源都督」が下った同じ大宰府に、かつて配流された顕基の祖父高明を想起するものであり、顕基の琵琶はその高明の琵琶である。長明が顕基に「琵琶をひきつつ」とさせたことで、高明流の琵琶を弾く顕基、経信流の琵琶を弾く長明という琵琶相承の関係が浮かび上がる。さらに言えば二人とも後継者をもつことなく、出家の身として仏道に心を入れていった共通性も浮彫りになる。

おわりに

『発心集』の顕基のせりふに付随する「いといみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ」という表現は、長明が自らの琵琶にまつわる情念を潜ませた表現であつたと思う。

配所は琵琶なくしては語れない。そこには、琵琶故に配所（に準じる）日野に晩年を送る長明の、琵琶相承者としての自負と怨嗟が込められていると見る。が、しかし、そこに留まることなく、顕基との自己同一化に託したごとく、数寄に心を寄せる自身の精神の浄化と俗世離脱を願う境地として、配所日野は積極的に甘受されるものとなった。『発心集』の顕基説話に付加された一見さりげなく見える叙述をめぐり、以上のように長明の琵琶への情念と仏道への意識を捉えたい。

- (1) 「長明と琵琶―『胡琴教録』と『手習』と―『国語と国文学』平成4・3、「『胡琴教録』の筑民部は誰か―長明作者の可能性をめぐる―」『飯山論叢』第15巻2号、平成10・1。なお、後者において筆者は、『胡琴教録』の「筑民部」を、『明月記』の記事などから「民部大夫」「後鳥羽院北面」である中原宗安であろうと推定し、かつ彼は有安の子息であろうと推測したが、拙稿発表後、『図書寮叢刊 伏見宮旧蔵楽書集成三』が刊行され(平成10・3)、所載の「楽家系図」中原氏系図の有安の子息に宗康(安)がおり、注記に「民部丞」「後鳥羽院御宇北面所可」とあることを確認した。
- (2) 新潮日本古典文学集成『方丈記 発心集』解説。
- (3) 戸谷三都江「顕基の説話と『徒然草』(一)」「『学苑』昭和48・1)および藤島秀隆「顕基中納言説話の構成と伝承」(『中世説話・物語の研究』桜楓社、昭和60)にも指摘がある。
- (4) 三木紀人「配所」(『国文学』昭和48・7)に考察がある。
- (5) 「『発心集』と唱導―津軽家本『中納言顕基事』など―」『国語と国文学』平成10・8。その根拠のみを列举すると、話題・順序が一致する。本文の一致も多く、異なる表現も言い回しの相違程度も多い。他書に見えず『発心集』のみにある叙述が『顕基事』にもある。『発心集』に見えず『顕基事』にのみある叙述は他書にも見えない。『顕基事』の事実誤認は『発心集』に特有の臚化表現から生じる。『顕基事』の対句を駆使した長文の文飾は、唱導用のテキストであることに起因するものであり、別伝承を想定させるものではない。『平家物語』の影響が見て取れるので、その流布以降の成立である。
- (6) 戸谷三都江氏も注(3)の論文で、『発心集』は顕基のせりふに長明が『琵琶行』を意識して叙述していると見ている。
- (7) こちらの詩の一節について、戸谷三都江氏は「顕基の説話と『徒然草』(二)」「『学苑』昭和48・8)で、顕基以前に享受された形跡がなく、以後の享受はすべて顕基説話の影響に依ると言い、顕基の白詩への関心の高さを明らかにしている。
- (8) 「琵琶行」には「元和十年」とあり、十年は左遷、十五年は赦免された年である。しかし小島孝之・浅見和彦編『撰集抄』(桜楓社、昭和60)、及び安田孝子他校注『撰集抄』(現代思潮社、昭和60)は、「元和十五年」に左遷されたとする理解が延慶本『平家物語』や『和漢朗詠集私注』に見られると指摘している。なお『撰集抄』龍門本には「元和十年」とある。
- (9) 永井義憲「松室仙人傳と語りもの」(『日本仏教文学研究』第一集、豊島書房、昭和41)によると、類話は他に、天理図書館蔵『松室仲算事』、彰考館蔵『松室仙人伝』、竹生島寶巖寺蔵『松室仲算奉納琵琶於竹生島之寶前記』がある。
- (10) 『小右記』寛弘八年七月二十六日条に、俊賢について「就中俊賢如狂……貪欲謀略之間共高之人也」と批判、万寿二年三月十五日条には、「民部卿謀略尤高、左中将公成昇進替、以右中将顕基遷任、左少将隆国可任中将、顕基隆国戸部子也」と、俊賢が息子達の昇進のために謀略を用いたと非難している。こうした俊賢像については長野賞一「宇治大納言をめぐる」(『日本文学の諸相』日本文学懇話会版、昭和17)が論じている。
- (11) 顕基と醍醐寺及び仁海については、土谷恵「小野僧正仁海像の再検討―摂関期の宮中真言院と醍醐寺を中心に―」(『日本

古代の政治と文化』吉川弘文館、昭和62）に詳しい。

(12) 菊亭本による。伏見宮本は高明の相承について菊亭本同様の内容を記すが、顕基に関する言及はない。

(13) 拙稿「鴨長明の晩年の思想及び醍醐寺との交流について―『発心集』橘守助説話の成立と受容を中心に―」『国文』昭和62・7

(14) 「すき人」と「すき物」の違いは『無名抄』『発心集』において見るかぎり区別されている。「すき人」は大納言成通と中納言顕基にのみ用いており、身分の高い者、また『無名抄』では永縁僧正という、僧でも身分の高い者に用いている。他の僧や地下には両書とも「すき物」を用いている。なお、五位の長明自身は『文机談』において「すき物」と呼ばれる。

(15) 「秘曲尽くし事件の起きた時期―長明大原在住期の可能性―」『説話文学研究』平成2・6。及び注(1) 前者の論文。

(16) 「二つの大原から日野への足跡」『中世説話文学の研究上』桜楓社、昭和57年

(17) 『文机談』も大原尾張尼を最も「経信のおもかげ」を伝える者としている。ただし『文机談』は有安の尾張尼からの相承を否定する。しかし、有安は『魚山声明相承血脉譜』によると大原来迎院三世長老湛敷の声明の師であり、また『弾偽褒真抄』には有安が良忍自筆の声明譜を相伝しているとあるなど、来迎院の声明に深く関わっている。一方、尾張尼は『古事談』一〇一話に、良忍に師事し、来迎院の大壇越になったとあり、来迎院を介して両者は結びつく。よって、『胡琴教録』の相承を否定し『文机談』を真とすることは、一概にはできないだろう。

(18) 「中原有安と大原尾張―琵琶桂流をめぐる情念―」『国語と国文学』平成7・4